

奨励賞

中高年の中途失明者、 重度視覚障害者の社会 復帰・社会参画を目指す

鍼・灸・マッサージ治療院

楽腰館



企業プロフィール

鍼・灸・マッサージ治療院 楽腰館

代表者：石川也寸志

〒311-4152 茨城県水戸市河和田2-1710

TEL & FAX 029-309-4976

業種および主な事業内容

鍼、灸、あん摩、マッサージ、指圧、機能訓練などの施術業務

従業員数

19名うち障害者数17名

<内訳>

視覚障害者17名(うち重度15名)(うち重複1名)

内部障害者1名(うち重度1名)(うち重複1名)

事業所の概要と障害者雇用の経緯

平成13年5月に水戸市河和田に視覚障害者4名がベッド数4台の鍼・灸・マッサージ治療院「楽腰館」を設立。中高年の中途失明者、重度視覚障害者の社会復帰・社会参画の場を提供するために事業を開始。14年11月に同市酒門町にベッド数6台の下市診療所、16年4月にひたちなか市共栄町にベッド数5台のひたちなか診療所を開院し、スタッフ19名(うち視覚障害者17名)の体制となり、順調に重度視覚障害者の雇用に拡大、社会参画の場を提供している。

平成16年9月、これらの治療院の事業をサポートするために、特定非営利活動法人ペインレス・メディカル茨城を設立、平成17年半ばまでに新法人の事務局を兼ねた診療所を水戸市内に開設する予定。



楽腰館は現在3カ所にある。そのうちの1つ、
下市診療所(水戸市酒門町)

中高年の中途失明者、重度視覚障害者に 雇用の場を提供

盲学校在学中から厳しい現実を 知らされる

現在、楽腰館の院長で特定非営利活動法人ペインレス・メディカル茨城の理事長の石川也寸志さんは、子どものときから1型糖尿病（生まれつきインスリンが出ない）で、インスリンを注射しながらも一般企業に就職していたが、平成7年についに失明。茨城県立盲学校に入学し、鍼・灸・マッサージ・指圧師の資格を取得する。現在40歳の石川さんが30代になってからの転身であった。

盲学校に入学して、盲学校の同級生の中に石川さんのような中途での失明者（それも40～50代の人）が思いのほか多いことに気がつく。

ところが、これら中高年の中途失明者はせっかく努力して三療の資格を取得しても、なかなか就職先が見つからないという現実に愕然とする。それを知った在校生の中には意欲を失い、退学する者も実に多いのである。

働き盛りで中途失明した中高年者の多くは、失明とともに仕事を失って、一時は生きる意欲まで失いかける人も少なくない。妻子を抱えて、何とか立ち

直り、新しい生きる道を求めて盲学校に入学したとしても、追い打ちをかけるように厳しい現実を思い知らされるのだ。

4人の同志が事業を開始

石川さんは在校生時代からこうした状況を何とかならないかと真剣に考えるようになった。しかし、明確な構想が固まらないうちに盲学校を卒業、取りあえず1年間だけは自宅の市営住宅の1室で開業する。

平成13年、石川さんはついに盲学校時代の同級生を中心に同志を募り、まずは自分たちの力でマッサージ治療院を開業することにする。その結果、視覚障害者の社会参画を何とかしたいとの思いを同じくする4人の同志が集結。水戸市河和田にベッド数4台の楽腰館がスタートする（4人のうち中途失明者は石川さんを含めて3人）。

いずれにせよ、全員重度視覚障害者による社会復帰・社会参画のためのユニークな事業がこうして始まったのである。



石川院長（左）と松川さん（右）



楽腰館は、視覚障害者の社会参画を何とかしたいとの思いから設立された。



壁に手すりを付け、通路もゆったりとしている院内

社員への受け入れ教育

本人への教育研修

設備改善

支援機器導入

職域・能力開発

介助者

意欲・意識改善

障害者雇用の推進に尽力

社宅の借り上げ、教育指導など、 雇用管理面でさまざまに工夫

採用は就職困難な重度障害者、 特に中高年の中途失明者を中心に

4人でスタートした楽腰館も、翌年には水戸市内の酒門町にベッド数6台の下部診療所を開設するが、既にこの段階で本格的な視覚障害者の雇用の問題に直面する。同館設立の趣旨からいっても、最も就職が困難な重度の視覚障害者それも中高年の失明者を中心に採用したいと考えた。そこで、ハローワークを通じて採用活動を行うとともに、新卒者に対しては都道府県の各盲学校や国立塩原視力障害センターあてに同館の案内を送った。

その結果、一定の人員は確保できたが、これら障害者の採用後、通勤手段の確保という最大の問題に直面した。

そこで自宅から通勤可能な者を除き、診療所近くに借上社宅を確保、診療所ごとに1台ずつワゴン車を配置して、安全な通勤を可能とした。なお、社宅も通勤も全額同館負担である(重度障害者等通勤対策助成金を活用しているため、実質負担は3分の1程度)。

現在は借上社宅は13戸に増加、3台のワゴン車を保有して、社宅・通勤管理を行っている。ワゴン車の運転は、元タクシーの運転手だった有償ボランティア2人と職員で行っている。

マナーなどの人材育成、技術・知識 などのキャリアアップにも注力

人生経験の豊富な中高年の中途失明者を別にすれば、視覚障害者の多くは幼少のころから盲学校の長期寮生活など、少人数あるいは特定の人との付き合いしかない経歴・環境に育っている。そのため、社会人としての教育が必要な者もいる。

そこで、社会人としての自覚を持ってもらうまで、従業員としての一定の教育・訓練、人材育成がどうしても必要である。そのため、電話の対応の仕方、

問診の仕方、職務上の申し送りの仕方などの職務上の対応マニュアルだけでなく、患者さん、上司や目上の人に対する接客・対応マニュアルを活用した教育・訓練にも力を入れている。

また、職業人としてのキャリアアップの面では、まず、初任者や未経験者の場合には、3カ月の研修期間を設け、その間、1日最低1時間以上、上司や先輩による技術指導を行っている。また、年間に24回(第1・第3木曜日)に学術向上を目指して、内部の研修会を行っている。

さらに、有資格者については、各人の技術向上のために全日本鍼灸マッサージ師会、日本東洋医学会、日本経絡治療学会などの各種学会や研究会への出席も、各自の意思を尊重して自由にできるようにしている。

診療所の改装、職場内バリアフリー など、安全対策も十分配慮

職場内の環境認知にも時間がかかる重度の視覚障害者が多数働く診療所では、衝突や転倒などの事故を未然に防止するための安全対策にも十分な配慮が必要なことはいうまでもない。また、中高年者が多いことから健康の保持・管理にも神経を使う必要がある。

まず、環境を十分認識してもらうためには、入社後1週間をかけて環境認知・安全確保のためのオリエンテーションを行い、職場内で介助がなくても自立歩行できるように訓練する。

安全対策としては、職場内のバリアフリー化を図り、段差をなくすためのフラット化やスロープ化、伝わり歩きのための手すり(壁、トイレ、玄関など)や要所要所の点字シール貼付、衝突防止のための引き戸への改装とグリップの装着、万一に備えて非常口の設置などを行っている。



通勤に使用しているワゴン車。そのうち1台は往診用にも使用している。



レジにも点字シールを貼って使用している。



履き替えに便利な玄関の手すり



非常口も新たに設置

各種の就労支援機器を活用、 コミュニケーション方法も工夫

奨励賞

パソコンにはすべて音声化装置を装着

健常者、弱視者、全盲者など障害状況が異なる従業員が同時に就労しているため、予約表・カルテ・顧客管理・伝票処理・郵便物の管理などの事務処理について統一するのは難しく、適切に処理されない恐れがある。例えば、同じ弱視者でも見え方が一様でないため、統一するには、すべての仕事を見えない前提で、音声化せざるを得ない。また、照明についても、弱視者1人1人によって適切なライトの種類・明るさなどが異なるという問題がある。必要な治療器具の取り扱いについても同様な問題がある。

そこで、パソコンについては、各診療所に1台導入し、すべて音声対応にしている。また、患者予約・管理ソフトについては同社が自社開発した。

照明については、蛍光灯、白熱球、ブルーライトなど各種可動式電気スタンドを設置、明るさを調節できるようにしている。さらに、ひたちなか診療所では天井の照明をシーリングライト（リモコンで明るさを調節できるもの）に改装した。

音声体重計、音声血圧計、音声体温計、超音波治療機、干渉波治療機、低周波治療機、音声タイマーなど、治療に直接必要な治療機器だけでなく、音声電卓、音声電話器・ファクスなど、できる限り、音と声の出るものを使用している。



酒門診療所に設置された音声パソコンでデータ入力する軍司さん



音声温度調節器



低周波治療器



干渉波治療器



音声血圧計

すべて言葉で表現するように指導

視覚障害者は通常会話により、人との情報伝達・コミュニケーションを行う。しかし、会話でも「あっち」「こっち」「あれ」「これ」などの言葉は理解に苦しむ。また、同じ視覚障害者でも、全盲者全員が点字の読み書きができるわけではない。

点字を読めるが書けない人、書けるが読めない人、中途失明者の中には点字自体が全くわからない人もおり、さまざまである。一般の活字を用いる弱視者でも、文字の拡大度や色の濃さ、色合いによって作業のしやすさには大きな差がある。それだけに視覚障害者との情報伝達・コミュニケーションにはきめ細かな対応が必要だ。

楽腰館では全従業員に対して、入社時や研修時に、考え方や意見、個人の思いなどは、すべて言葉で表現するように厳しく指導している。特に健常者（従業員、患者さん、関係者など）に対しては、少しでも理解が得られるように、積極的に話しかけて意思の疎通を図ることを求めている。

また、仕事上の連絡では、メモの代わりにICレコーダや音声パソコンを使い、文字の読み書きはできるだけしないようにしている。

弱視者のためのルーペ、単眼鏡、拡大読書機、スキャナーなども使用している。読み書きについては、初心者に対してはていねいに指導し、全員が音声パソコンを使用できるようにしている。

さらに、毎朝、健常者が中心になって、仕事上の申し送りに漏れがないように、ミーティングで確認することも忘れていない。

社員への受け入れ教育

本人への教育研修

設備改善

支援機器導入

職域・能力開発

介助者

意欲・意識改善

障害者雇用の推進に尽力

改善・取り組みの実例

問題点・課題	改善策と効果
中高年の中途障害者の応募者がいなかった。	ハローワークを通じての相談だけでなく、全国の盲学校や国立塩原視力障害センターに楽腰館の案内を郵送するなど、積極的な採用活動を展開した。県外からの求職者の相談にも応じた結果、現在40歳以上の中高年者が14名となっている。
視覚障害者の通勤手段の確保が課題となった。	重度障害者等通勤対策助成金を利用して、診療所近くに借上住宅を確保し、また、各診療所にワゴン車を配置することにより、安全な通勤が可能となった。
多数の重度視覚障害者の雇い入れに伴い、衝突や転倒などへの事故防止対策が不可欠となった。	<ul style="list-style-type: none"> ・新入社員に対しては、入社後1週間かけて環境認知・安全確保のためのオリエンテーションを行うことにより、職場内の自立歩行が可能となった。 ・物理的な環境の改善については、段差解消のためのフラット化やスロープ化、手すりの設置、要所への点字シール貼付、引き戸への改装、非常口の設置などにより、バリアフリー化を図った。
視覚障害者はそれぞれ視覚障害の状況が異なるため、個々の障害状況に合ったパソコン操作環境、照明、および治療機器の条件が必要となった。	<ul style="list-style-type: none"> ・パソコン操作環境については、各診療所のパソコンをすべて音声対応にした。 ・照明については、蛍光灯、白熱灯、ブルーライトなど各種可動式電気スタンドを設置するなどした。 ・治療機器はすべて音声対応にした。 ・これらの改善により、視覚障害者全員が、パソコン、照明、治療機器などを支障なく使える環境が整った。
視覚障害者とのコミュニケーションでは、見え方に応じた情報の伝達手段が必要となるため、きめ細かな対応が必要である。	<ul style="list-style-type: none"> ・入社時や研修時に、自分の考えは言葉で表現するように指導している。 ・仕事上の連絡では、ICレコーダーや音声パソコンを使用している。 ・弱視者のために、単眼鏡、拡大読書器、スキャナーなどを使用している。
社会人としての教育訓練が必要な視覚障害者もいる。	接客対応マニュアルなどを活用して、社会通念上のマナー、エチケットなどを教育した結果、社会の一員としての自覚やマナーを身につけるようになった。



特定非営利活動法人ペインレス・メディカル茨城事務局の松川順悦副理事長(57歳)

ビール会社に30年勤務後に網膜色素変性症で視力が衰えたため、早期退職に依る。国立塩原視力障害センターで資格取得後、平成14年に楽腰館に入社。障害2級。現在は、障害を気にせず、有意義な活動ができる仕事や生活に満足している。将来は仙台にNPO法人の宮城支部を創設して、活動を拡大していきたいとのこと。



軍司有通さん(56歳)

医療機械開発の技術者だった平成2年にパーチェット病になり緊急入院。命は助かるが失明して眼球摘出となる。入院中には何度か自殺を試みたほど。平成6年盲学校卒業後、資格を取得するが、就職先がなくていったん開業。

その後、マッサージ師以外にもパソコンの技術を取得して再就職するなど、視覚障害者の生きる道をアドバイスする障害者支援相談センターの相談員を引き受ける。中途失明者の再就職問題で院長の考えに同感し、平成16年に入社。

今後、勉強会などでお互いにスキルアップを図り、視覚障害者ももっと多方面で活躍できるようにしていきたいとのこと。



吉田里江さん(28歳)

先天性の視覚障害者(1級)。資格取得後、整形外科の病院に勤務したが、病院勤務では治療技術が身につかないなどの点で、悩んでいたところ、院長と知り合い、人柄と考え方に引かれて、開業メンバーの1人となる。楽腰館に来てからは勉強することが多くて、充実しており、何よりもうれしいのはハンディがあることがマイナスにならないことだという。



子どものころから弱視だったが、年とともに加齢性黄斑変性になり中心の視力がない。もともとあん摩マッサージ指圧師の資格を持っていたが、主婦で資格は活用したことがなかった。平成13年に楽腰館に入社、患者さんに楽になったといわれるのが何よりの励みとか。

原沢美智子さん(64歳)



さらに従業員のスキルアップを目指す。

今後の課題&挑戦

自由診療では限界、 健康保険診療にもっと力を入れる

楽腰館のようなマッサージ診療所は、人口5万人規模で1カ所が適正な配置といわれる。今年の6月に事務局兼診療所が開設すると4カ所目。人口25万人弱の水戸市とその周辺という規模では、とりえずこれで拡大は一段落と同館では考えている。

今後は従業員の学術向上などスキルアップのために、もっと予算を割いていく予定だ。そのうえで、現在のような健康保険外の自由診療主体の経営では限界があるため、鍼・灸・マッサージ指圧を医師の同意を得て保険申請すること、つまり健康保険診療にもっと力を入れていくとともに、自賠責保険分野の診療にも取り組んでいく。その勉強会を現在続けており、保険診療などではすでにかなり実績を上げてきている。

可能性を多角的に追求し 将来の夢は社会福祉法人化

現在、すでに自由診療と健康保険診療が2本柱に

なろうとしているが、将来はさらに居宅介護サービス事業所として介護保険分野にまで進出したいと考えている。

現在、具体的にどのようなことができるか研究中だが、ケアマネジャーの資格取得を目指している従業員も2人ほどおり、近いうちに介護保険の居宅介護支援サービス事業所としてスタートすることになる。

すでに平成16年9月に特定非営利活動法人ペインレス・メディカル茨城を設立、その事業内容には鍼・灸・あん摩・マッサージ・柔道整復術・機能回復訓練などの在宅施術（往療）、外来診療、有償ボランティアによる介護サービス（身体介護・家事援助など）の生活支援を行うことをうたっており、受入体制は整っている。

そうなれば、同館の事業の柱は、自由診療、健康保険診療、居宅介護支援サービス事業の3本になる。ただ、石川院長の将来の夢としては、視覚障害者にできる可能性を多角的に追求しながら、遊べる老人ホームなどをつくり、できれば社会福祉法人にしたいということである。

こうした大きな夢を抱きながら、楽腰館はさらに羽ばたこうとしている。



院長が語る

障害者だからできる社会貢献を追求していきたい

鍼・灸・マッサージ治療院 楽腰館院長
特定非営利活動法人ペインレス・メディカル茨城理事長の石川也寸志さん

盲学校で苦勞してせっかく資格を取得しても就職する場がない中高年の中途失明者や全盲の視覚障害者に社会復帰、社会参画の場所を提供したい。

私たちが事業をスタートした目的はここにあります。現在、20名近い視覚障害者の参加を得て、私たちができるマッサージ技術で社会復帰、社会参画を果たしながら、それなりの雇用を確保しています。そして、学術向上などスキルアップに取り組みながら、さらに機能回復訓練などを中心に介護サービスの分野にも進もうとしています。私たちが単に社会復帰・社会参画の一定の目標を達成しただけで満足しないのは、視覚障害者の可能性をもっと追求したいからにほかなりません。

昨年の中越地震のとき、体育館で寝ていて関節痛がひどくなった人、自動車の中で寝起きしていてエコミー症候群から亡くなった人などの話を聞き、居ても立ってもいられなくなりました。

NPO法人を立ち上げたばかりでしたので、NPOとして私たち視覚障害者にできることはないか、被災地に問い合わせ、従業員の有志を募って川口町に駆けつけました。結果的に、11月5日から30日まで、全会員延べ117人がボランティアで参加、2,000人以上の被災者に無料でマッサージなどの手技療法を提供することができました。

もちろん、視覚障害者がボランティアで被災地に出かけるわけですから、運転などの面で健常者の手助けが必要でした。また、かえって足手まといになるのではという周囲や自分自身の壁もありました。しかし、そのような壁を乗り越えて、たとえ視覚障害者であってもこのような災害に遭った方々に対してお手伝いすることができることを、全従業員が身をもって実体験できたことが何より素晴らしかったと思っています。

このような貴重な実体験を財産にして、私たちは、私たちのできることでさらに社会に貢献したいと願っています。